



(彦根西部)

滋賀・斗西遺跡 とのし

- 1 所在地 滋賀県神崎郡能登川町大字神郷・佐野
- 2 調査期間 一九八九年(平一)七月～一九九〇年九月
- 3 発掘機関 能登川町教育委員会
- 4 調査担当者 植田文雄
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 三～一二世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

斗西遺跡は、琵琶湖東岸部に開けた愛知川左岸沖積地に所在する。独立山塊の和田山により、度重なる氾濫から守られた幅約1km、長さ約3kmの舌状微高地に位置し、隣接する中沢遺跡・法堂寺遺跡を含めると、総面積約二八ha以上にも及ぶ大集落を形成していたところである。

本格的な拠点集落の生成は弥生時代後期に始まり、古墳時代を通じてこの地域

の中心地であったと目される。これまでに明らかになったところでは、二条の自然河川に囲まれた微高地上に、七～八棟を一単位とした小集団が一時期に十数集団形成されており、平地の前方後円墳も消失したものを含めると少なくとも三基以上存在する。近辺は、在地豪族の居住する集落であったと推察される。

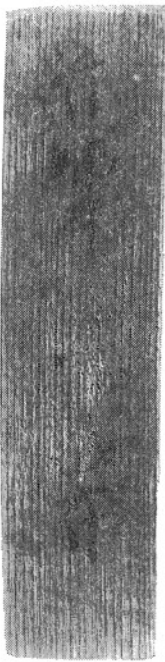
律令制下においては神崎郡神主郷に比定される。当遺跡の約4km南方の五箇荘町大郡遺跡では、近年東山道沿いに、回廊と目される柱列や、条里方向に軸をもつ建物群が検出されており、今のところこれを神崎郡家に比定する意見が主流となっている。ただし、後述するように当遺跡では多数の墨書土器や、八～一〇世紀の建物群も検出されており、古代の役所と拠点集落の実質的な関連を考えた場合、当遺跡を郡家に比定する余地もないわけではない。なお遺跡の標高は九五m前後で、現在の琵琶湖の平均水面高より約一一m高い。

さて、木簡は先述した自然河川のうち南から西方をめぐる河川から出土している。河川は最も幅の広いところで約五〇mを測るもので、深さは検出面から約二mを測る。この河川は弥生時代後期～古墳時代にかけて、言わば環濠としての役割を果たしていたようで、ここから集落内に導水する小溝は、集団の区画とされていたと想定できる。河川の下層は古墳時代前期の単純層であるが、それより上は平安時代前期までの混在土層であり、共伴土器から木簡の時期を特

定することは困難である。しかし、この河川跡からは総数一四三点の墨書土器や、風字硯、転用硯なども出土しており、墨書土器の土器型式からは奈良時代末～平安時代初頭が中心時期と判断できる。墨書土器には「知万呂」など人名や、「大家」「厨」「厨田」「椋家」など官衙的な要素の強いものが多く認められる。

このほか河岸の敷地点では手づくね土器の一括投棄遺構や、木製模造品、斎串等多くの祭祀遺物の出土があった。特に木簡の検出された付近では祭祀遺物が多く出土している。ただし、木簡は河川の中央部で発見されており、直接祭祀遺構との関連はないと思われる。また、この河川跡からは整理用コンテナで一五〇〇箱以上の土器、

道師布施百四布



一〇〇〇点以上の木器が出土している。特に木器の残存状況は良好で、古代の生活様式を復原する良好な資料となるだろう。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「道師布施百四布」

108×27×4 011

木簡は上下の削り痕を残す完形品である。釈文からは、布を道師の布施としたことが読みとれる。「道師」については、道教と関わる「道士」説と、仏教での「導師」説が考えられる。これまで道教が古代史上明瞭にあらわれた例は極めて少なく、古代仏教史・宗教史など関連諸学の検討を仰ぎたい。

なお、釈読については奈良国立文化財研究所綾村宏氏・館野和己氏を煩わせた。

9 関係文献

植田文雄『斗西遺跡』、『能登川町埋蔵文化財調査報告書』一〇 能登川町教育委員会 一九八八年

(植田文雄)